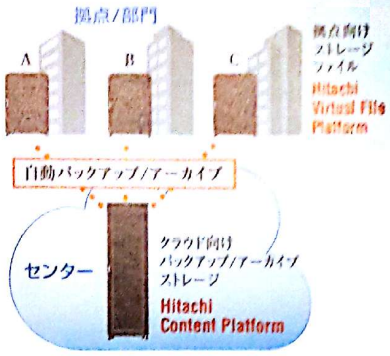
Q：どう止める？ 増え続けるデータの管理コスト。
A：コンテンツクラウド

分散するNASのデータをセンターに集約し、TCOを大幅に削減。
“コンテンツクラウド”の時代です。

拠点の仮想ファイルプラットフォーム「Hitachi Virtual File Platform」からコンテンツデータをセンターに集約、データ管理を自動化。しかもファイル仮想化により、ユーザーの使い勝手はそのまま――それが日立の“コンテンツクラウド”です。また、災害などで万が一拠点のデータが失われてもセンターからすぐにデータを回復可能。事業の継続性も高められます。増え続けるデータのさらなる効率的な管理へ―― 舵を切るなら今です。

TCO：Total Cost of Ownership



仮想ファイルプラットフォーム
Hitachi Virtual File Platform

Hitachi Storage Solutions
日立ストレージソリューション
www.hitachi.co.jp/storage/

日経コンピュータ
2011年 8月18日号
第 16 回顧客満足度調査
ストレージ専用装置部門 1位

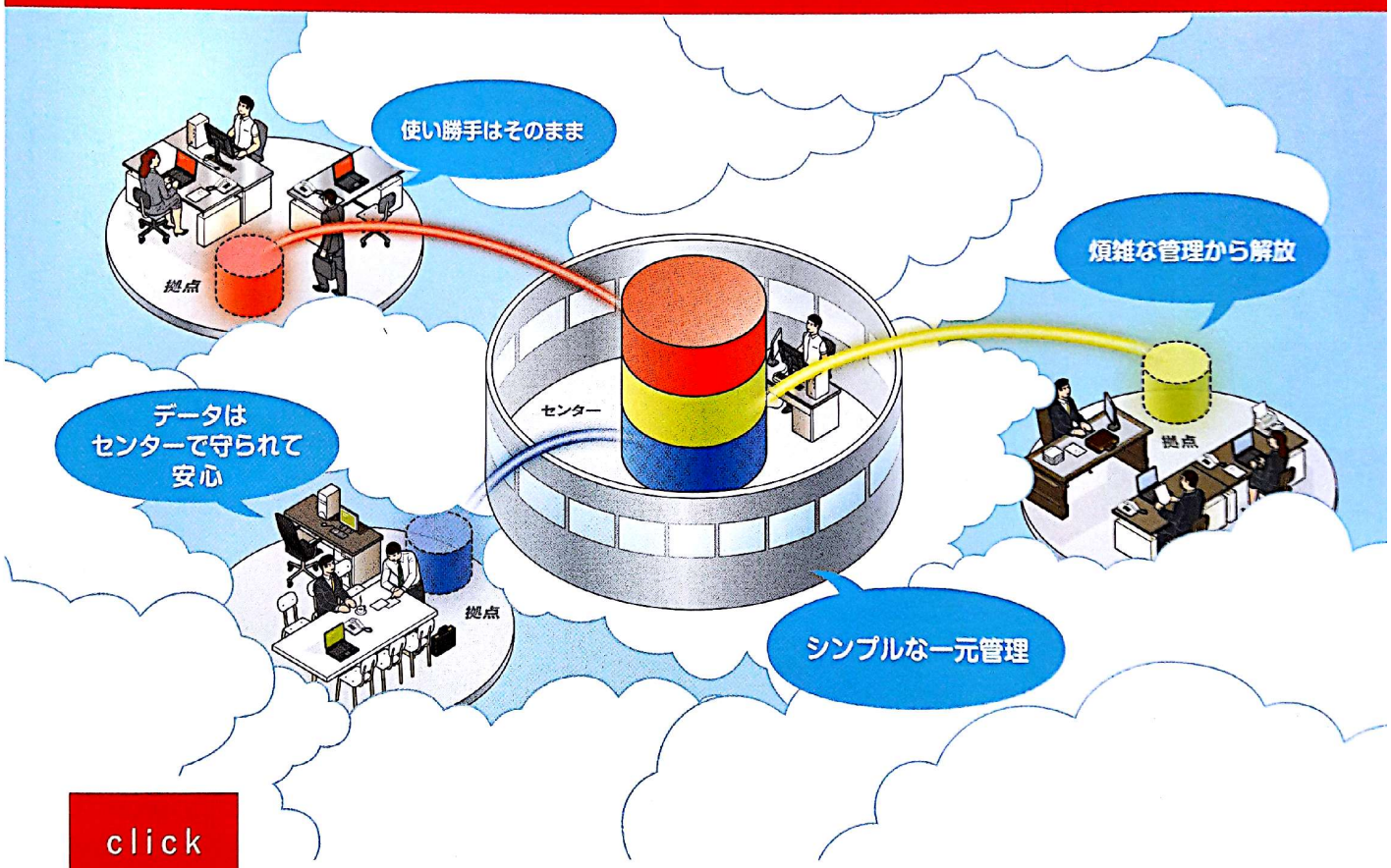
4年連続 No.1
日経コンピュータ 2011年 2月3日号
第13回 パートナー満足度調査
ストレージ部門 1位

日立ストレージは
ディスクストレージ市場
15年連続
国内売上げ 第1位*

＊出典：IDC Japan,2011年5月「国内ディスクストレージシステム市場2010年の分析と2011年～2015年の予測」(J11420102)　1996年～2010年による。

クラウドは インフラである。

頼れるクラウドは日立



click

日立のクラウド 検索

日立クラウドソリューション
Harmonious Cloud
ハーモニアス クラウド

株式会社 日立製作所
RAIDシステム事業部
■お問い合わせは (03)5471-2201

HITACHI
Inspire the Next

Daisanbunmei 昭和37年7月16日第三種郵便物認可 平成23年11月1日発行(毎月1回1日発行)通巻623号 編集人／中村智雄 発行人／大島光男 発行／第三文明社 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-23-5 TEL.03-5269-7151(編集)7145(営業) 定価500円 本体476円

雑誌 06025-11 印刷／凸版印刷株式会社
Printed in Japan

4910060251112
00476

Scanned by CamScanner

［インタビュー］

平和博物館創設に向けて ズットナーの功績を語る

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン

平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）統括コーディネーター／ブラッドフォード大学客員講師

社会のなかで女性が発言権を有していなかった時代に、作家であり、女性平和運動家であったベルタ・フォン・ズットナーは、先陣をきって平和を叫び、行動した。

今年四月には、ズットナーの著作『武器を捨てよ！』の日本語版が出版されている。

女性初のノーベル平和賞受賞者であるズットナーの軌跡と功績を長年研究しているピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士に、ズットナーが開いた平和への道について聞いた。

――今年八月、立命館大学国際平和ミュージアムにおいて、「ベルタ・フォン・ズットナー展」が開催されましたね。

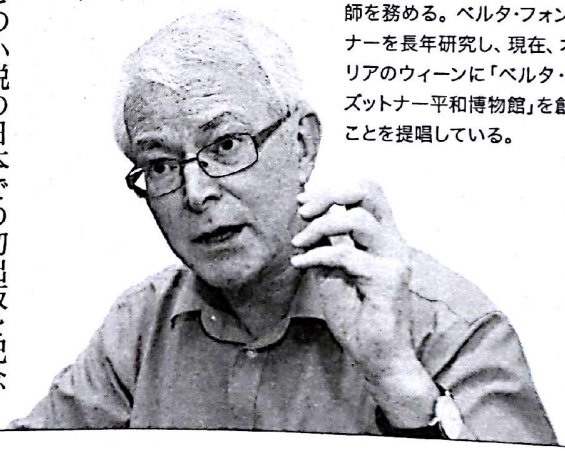
博士　ズットナーは、かの有名な科学者アルフレッド・ノーベルの秘書として、平和問題に強い関心を持ち、一八八九年に、小説『武器を捨てよ！』を出版。生涯を平和運動に捧げ、国際的な指導者にもなりました。このたびの展示は、この小説の日本での初出版を記念してのものでした。

――博士が、ズットナーを調査・研究されるようになったきっかけは何だったのでしょうか。

博士　一九七〇年代、私は十九世紀の平和運動に関する資料を調べていました。その活動のなかで、必然的に彼女に出会ったのです。

――日本でズットナーのことを知る人は、決して多くありません。ズットナーとは、どんな人物だったのでしょうか。

ベルタ・フォン・ズットナー



Peter van den Dungen
平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）統括コーディネーター、ブラッドフォード大学客員講師を務める。ベルタ・フォン・ズットナーを長年研究し、現在、オーストリアのウィーンに「ベルタ・フォン・ズットナー平和博物館」を創設することを提唱している。

Scanned by CamScanner

博士　彼女の父親はオーストリア・ハンガリー帝国軍の陸軍元帥でした。彼女はその影響からか、三十歳ごろまでは、当時の一般的な愛国心や戦争についての考えを受け入れていたようです。

ところが、政治や平和について考えるようになってからは、考えが大きく変化し、平和こそ人類が目指すべき道であり、人類の生存のためには戦争の廃絶が必要であると考えるようになりました。

ちなみに、当時の大学は、女性に対し門戸を開いていなかったので、彼女は独学で政治や平和について学んだのです。

そもそも彼女が生きていた時代は、社会のなかで女性の発言権はありませんでした。そうしたなかで、女性が戦争や平和について語り始めたこと、そして当時の戦争や軍隊に関する考えを批判したことは、実に驚くべきことでした。結果として彼女は、嫌がらせを受けるようになったのです。

――ズットナーは、科学者アルフレッド・ノーベルの秘書として働いていました。ノーベルに対しても、相当な影響を与えたそうですね。

博士　ノーベルは、知的で有能なビジネスマンであり、非常に現実主義的な人物でもありました。当初、ノーベルは平和運動に身を捧げる彼女に対し、こう言ったのです。「君がやっている草の根の平和運動などというものは、うまくいかないだろう。この世には私が開発したダイナマイトや、もっと強力な大量破壊兵器(彼は後々、核兵器や化学兵器が生まれることを見越していた)があり、ボタンを押せば世界を吹き飛ばすことができる。そうなって初めて、人々は正気を取り戻し、戦争はなくなるだろう」と。

それに対し、彼女は「それはあまりにも危険すぎます。そうならないように私たちは努力をすべきです」と説得を繰り返したのです。ノーベルはその情熱に対し、「君の説得と行動が私を納得させることができれば、そのとき私は、平和のために何かをしよう」と約束します。

その後のノーベルを見れば、彼女の説得が成功したことは明白です。なぜならノーベルは、自身が創設したノーベル賞のなかに「平和賞」を設置し、平和運動に力を貸すようになったからです。彼女は、その最初の受賞者になってもよかったとは思いますが、実際は一九〇五年に受賞しました。女性では初のことでした。

――ズットナーの小説『武器を捨てよ!』に込められたメッセージは、何だったのでしょうか。

博士　この本は、女性や母親の視点から戦争について書かれた初めての本です。夫を戦争で亡くした女性が懸命に生きる姿を通し、戦争の悲惨さ、また女性や子どもたちの苦しみが描かれています。

出版(一八八九年)から十年後に、第一回万国平和会議(ハーグ会議)が開催されました。この会議には二十六カ国が参加し、国際紛争平和的処理条約などが締結された非常に重要な会議でした。彼女は、この会議の唯一の女性参加者としてオブザーバーを務め、多くの参加者に影響を与えました。この会議はさまざまな力が結集されて実現したものですが、彼女とその平和運動の功績も大きかったと思っています。

小説家レフ・トルストイは、彼女についてこう語っています。

「アメリカの奴隷制度廃止を先導したのは、ハリエット・ビーチャー・ストウの『アンクル・トムの小屋(Uncle Tom's Cabin)』だ。そして、戦争廃止を先導したのは、ズットナー、あなたの小説『武器を捨てよ!』だと思っている」と。

――平和のために、今後、われわれはどのような道を進むべきだとお考えですか。

博士　現代の戦争は、十九世紀以前の戦争と比べ、いっそう残酷になりました。武器の破壊力は爆発的に増し、攻撃範囲も広がり、ときには民間人をも巻き込みます。よって、いまの私たちに求められ

Scanned by CamScanner

るのは、もっと抜本的なアプローチです。

ご存じのとおり、国連憲章においては、自衛目的と認められる場合を除いて、戦争は正式に禁止されており、制裁の対象にもなります。しかし、こうした条文は十分に守られていないことも事実です。

一七九五年、イマヌエル・カントは、主著『永遠平和のために』のなかで、平和構築の条件の一つは、各国の関係を統治するようなある種の共通の法体制の確立であると述べています。また特に、各国の常備軍の削減、最終的には撤廃を挙げています。なぜならば、常備軍が軍備拡張競争につながることは必至であり、それは必ず戦争を招くからです。

これは、武器を持たないという意味ではありません。カントはスイスを引き合いに出し、純粋に自衛のための軍隊は持つことができると述べています。そして、ノーベルが平和賞にふさわしいと考えたのは、常備軍の廃絶、または縮小でした。

――平和を脅かすものとして、核の恐怖はますます高まっています。

博士　もし、いま、ズットナーが生きていれば「核を捨てよ！」と叫んだでしょう。世界はもっと核の恐怖について知るべきです。広島や長崎の平和博物館と同じような博物館を、ワシントン、パリ、モスクワ、北京など、核保有国すべての首都に造るべきです。それは民衆の世論に影響を与え、核兵器廃絶のための世界の運動を強化することになるでしょう。

ノーベルは平和賞について、平和運動に尽力する貧しい人々や青年に贈られることを望んでいました。その理由をノーベルはこう述べています。「この賞金を得れば、生計を心配する必要がなくなり、自分の時間や力をすべて平和のために費やせるようになるからだ」と。ところが実際には、時に戦争に関わった人を含め、主要な政治家にしばしば授与されているのは、残念なことです。

広島と長崎に原爆が投下されて六十五年以上が経ちましたが、いまだ、被爆者に平和賞が贈られていないのは、どういうことでしょうか？　恥ずべきことです。

ノーベル賞委員会は、二十世紀の偉大な平和主義者であるマハトマ・ガンジーに平和賞を贈らなかったという重大な過ちを犯しましたが、私は新たな過ちを犯すことを危惧しています。それは、被爆者一世が高齢化しており、もっとも賞にふさわしい彼らに贈れずに終わってしまうかもしれないからです。

――博士は、二〇一四年を目指し、オーストリアのウィーンに「ベルタ・フォン・ズットナー平和博物館」を創設することを提唱されていますね。

博士　戦争博物館は世界にたくさんありますが、反戦平和運動の博物館はほとんどありません。しかし、反戦平和運動の歴史は実に深く、重要な史実として、私たちに多くの示唆を与え、平和運動家に希望を与えてくれるでしょう。ウィーンは、ズットナーの故郷です。そこに、ズットナーとノーベルの功績を中心に据えた博物館を、彼女の死と第一次世界大戦勃発から百周年となる二〇一四年に建設するのがよいと思っています。

――博士はこれまでに、創価大学で平和講義をなさったことがありますね。

博士　私は池田博士とトインビー博士の対談集を読み、国連などでの展示をはじめとするSGI（創価学会インタナショナル）の平和活動を知り、深い感銘を受けました。創価大学はキャンパスも美術館も立派で、素晴らしい友人もたくさんできました。

さらに、池田博士が発表される毎年の平和提言は、非常に包括的で説得力のある重要な平和へのメッセージだと思っています。

私はSGIの平和への熱意と行動に共感しています。これからも共々に、平和への歩みを進めていきたいと念願しています。

Scanned by CamScanner